

直売比率を高めて飼養羽数の減少に対応 ～地域密着型の卵直売所を目指して～

刈谷市 すすき けんゆう まさひろ
鈴木 劔祐・将大さん
畜産（養鶏）

【平成 26 年 8 月 18 日掲載】

刈谷市で純国産地鶏の卵を生産する鈴木劔祐さんを紹介しします。後継者である将大さんの就農後は、販売方法を市場出荷から消費者への直接販売に切り替えました。オリジナルの発酵飼料を用いて生産された鶏卵は、濃厚で味が濃いと地域住民を中心に多くの顧客の心を掴んでいます。

養鶏家の跡取りとして

劔祐さんは中学校卒業後、サラリーマンとして働いていました。しかし、かつて養鶏業を営んでいた父が亡くなったことで高浜市吉浜地区の養鶏場跡地を相続することになります。「サラリーマンをしながら跡地の固定資産税を払っていくなら、もう一度養鶏を開始しよう」と昭和 44 年に会社を退職し、25 歳で就農します。

養鶏の知識を持たずに就農した劔祐さんでしたが、幸い近隣で姉夫婦が養鶏を営んでいたことから見よう見まねで飼養技術を学びます。また、就農時より所属した吉浜養鶏農業協同組合（平成 23 年解散。以下、組合）には、当時 250 名近い組合員がおり、お互いが切磋琢磨し合いながら技術を学ぶことができたそうです。

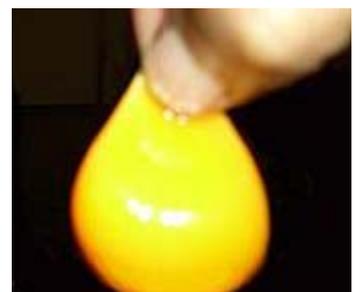


鈴木劔祐さん（左）と後継者の将大さん（右）

卵価の低迷と養鶏組合からの脱退

昭和 50 年には都市化の影響で刈谷市への移転を余儀なくされますが、その後は順調に増羽し、後継者の将大さんが就農した平成 14 年には 2 万羽を越す飼養羽数となります。

しかし、元号が平成に変わる頃から卵価は、低水準で推移していたのに加えて、平成 15 年頃からは徐々に飼料価格が高騰し始めます。サラリーマンとして外の世界から実家を見ていた将大さんは、既存のシステム（養鶏場→組合→小売店）で鶏卵を出荷していたのでは、鶏卵



新鮮なプルンたまごの黄身は、つまんでも潰れない。

相場の影響を受けやすく、いくら増羽しても飼料価格の上昇を補うことはできないと考えていました。組合理事の経験もあった劔祐さんにとっては苦渋の選択でしたが、家族での話し合いを経て、平成 16 年に組合からの独立を決意します。

組合を抜けてからは、将大さんが中心となって消費者への直接販売に力を入れるようになります。



純国産地鶏の「さくら」（左）と「もみじ」（右）

味にこだわった鶏卵生産への転換

当初は、その日の鶏卵相場を元に価格を設定していた将大さんでしたが、刈谷駅前の朝市や鶏舎に隣接する直売所でお客さんと直接接するうちに、「消費者はおいしいものなら、ある程度の価格差は許容してくれる。」と考えるようになります。その後、親子で議論を重ね、価格を固定して販売する代わりに徹底的に味にこだわった鶏卵生産への転換を決定します。

まず初めに行ったのが飼養する鶏種の変更でした。産卵能力に優れた「白色レグホーン」から産卵能力は劣るものの濃厚な卵が生産される国産地鶏「さくら」と「もみじ」に変更します。続いて、組合時代から使用していた配合飼料に昆布やかつおの出汁ガラを発酵させて作成したオリジナル飼料を加え、アミノ酸などの旨み成分の向上を目指しました。また、将大さんは、いくら良いものを生産しても認知されなければ始まらないと、自社で生産する鶏卵を「プルルンたまご」と名づけて、インターネットを用いて積極的に情報発信しています。



プルルンたまごの味の決め手となるオリジナルの発酵飼料（上）と発酵装置（左）

逆境をバネに、地域密着型の店舗を目指す

鈴木家では現在、生産量の5割近くを消費者に直接販売しています。しかし、組合から独立後の2年間は2割程度を推移していたそうです。その当時は飼養羽数も多く、販売になかなか労力を注ぐことができませんでした。今後の経営方針を考えていた矢先の平成20年6月、鶏舎の一部が焼失し、飼養羽数が大きく減少する事故が発生します。「運命の転換点だった。」と鈴木親子が口を揃えるように、この事故がきっかけとなり直販率の向上に力を入れざるを得ない状況になったそうです。

現在の直売店舗は火事で焼失した鶏舎の一部を改良して営業しており、販売スペースも2倍以上に広がり、車10台の駐車場と自動販売機も備えています。また、直売所の再建時には近隣の3万戸にチラシを配布し、新たなスタートをPRしたそうです。

「火事の際には、近隣のお客さんが本当に心配してくれた。」と顧客によって支えられていることを実感した将大さんは「地域超密着型の経営を目指していきたい。」と強く思うようになったそうです。現在は、リピーターがお得に卵を購入できるようなサービス券を鶏卵に添付するなど、従来からの顧客を大切にしたいサービスの提供を心がけているそうです。また、地域のつながりを大切にする鈴木家では地域資源の循環にも力を入れており、発酵飼料に使用する資材は地元醸造メーカーから仕入れています。さらに平成23年からは、刈谷市で生産された飼料米を餌の一部に使用しています。最後に将大さんは、「今後も地域の中で『ウィン・ウィンの関係』を構築していきたい。」と語ってくれました。



生みたての卵を購入できる直売店舗

※「朝採りプルルンたまご専門店」 TAMAGOBOW

→ <http://www.s-eggs.net/>

執筆：農業経営課

取材協力：西三河農林水産事務所農業改良普及課